

朝鮮戦争前後の京都の学生運動

西 一
不審商科大学教授

一 現代の危機と

五〇年代学生運動

安倍内閣の七〇%を超える支持率は、政治学でいう「保守革命」、「新保守主義」のひとつの到達点ということが出来る。「新保守主義」とは、森政稔氏が定義しているように、福祉国家的な改革に対抗して、政治的・文化的には、保守主義をとりながら、経済的には新自由主義を徹底的に進める政策である（『変貌する民主主義』ちくま新書）。改憲路線を強引に押し進め、アジアに新しい「冷戦」の危機を創りながら、TPPに参加して、「アベノミクス」といったインフレ政策を推進しようとしている安倍内閣こそ「保守革命」の極北である。

学でも、人事権や授業の編成権を学長に一元化し、学科を廃止しようとする改革案が出されてきている。それを推進している大学の執行部は、それこそが新自由主義的な大学改革（改悪）であるということさえ、よくわかっていないという「痴呆」状況である。

このような状況のなかで、どのような対抗文化（運動）をつくらなければならないのか、という問題を考えるために、私はここ数年、明治期から戦後史に研究テーマを変え、特に一九五〇年前後の民衆運動や学生運動を研究している。まず早稲田大学の吉田嘉清氏から始めて、京都関係では、小畑哲雄（小樽商科大学『人文研究』一二〇号）・中岡哲郎（『アーナ』一一号）・上田篤（同『人文研究』一二二号）・坂東慧（『商学討究』六三巻二・三号）氏らの聞き取りを掲載している。これらの聞き取りは、インターネットの使える人は、小樽商科大学の図書館のホームページに入って、Baredという所から私の名前前で引いていただければ、すぐに読

めるようになっていく。使えない方は、私の所（〒601-1321 京都市伏見区醍醐北端山五―二）に、ハガキを送っていただければ、すぐにお送りする。

ここ数年、五〇年代の学生運動を総括する動きが各地で活発になり、東北大学や北海道大学の反イールズ闘争の記録が公刊され、東大や早稲田では以前から学生運動史が出されてきたが、何とも関西の動きが鈍いというのが実感であった。それもあって聞き取りを始めたのだが、京都については、以前から中岡哲郎氏の『現代における思想と行動』（三一新書）や豊田善次氏の『高橋和巳の回想』（構想社）などの著書、大島渚氏の回想、本誌の小畑哲雄氏らの記事など、優れた記録があった。その上、近年になって田中貞夫・太田雅夫編著の『五〇年代の群像 同志社の青春』（刊行会）が出版され、同志社出身の徳山詳直氏の『芸術立国』（幻冬舎）や京大出身の坂東慧氏の『昭和とは何であったか』（日本評論社）などの回想記が次々と公刊されている。

そして、昨年から『大原社会問題研究所雑誌』（六五二、六五三号）が、五〇年前後の学生運動の特集を組み、六五三号には京大出身の小畑哲雄・望田幸男氏の記事が載せられている。六〇年前というのとは一つの節目で、記録を残そうという動きが個人のみかでも出てきている。

二 新しい資料の発掘に

現在の私は、一〇〇人以上の人から聞き取りを進めるとともに、文献資料の発掘に努めている。京都大学の大学文書館の資料や京都府立総合資料館の文書以外に、いろんな資料が存在する。ひとつは為政者の側の資料で、GHQの文書は、一部は公刊されているが、『日本占領・外交関係資料集』柏書房、膨大なマイクロ・フィルムが、立命館大学に所蔵されている。何よりアメリカのナショナル・アーカイブの調査が必要で、今夏は一カ月ほど、ワシントン暮らしをするつもりである。

宮内庁書陵部や国立公文書館の資料調査は終わったが、ここでも京大天皇事件などで面白い文書がでてきている。機会があれば、本誌でも紹介したい。また法務府特別審査局（いわゆる「特審局」）の文書である。これは以前から『特審月報』が不二出版から公刊されているが、特審局に

関連する文書が、かなり公刊されてきている。特に破防法の制定に係わった特審局の関之氏の文書が、近代日本史料研究会によって目録が作られ、国会図書館の憲政資料室に保管されながら、現在でも未公開になっているのは残念である。

運動の側の資料として興味深かったのは、日本共産党の関西地方委員会の資料が、大阪の岩井会に保存されていたことである。志田重男氏の遺稿集を編纂された渡辺照子氏がご健在で、今でも資料を守っておられる。

おそらく個人の文書ということになれば膨大であり、私も京大天皇事件で中岡氏に公開質問状を書くように頼んだ、京大共産党の指導者榎並公雄氏の文書をご遺族から預かっている。昨年からの引越しと目の手術に紛れて、未だに整理していない。この会に参加しておられる方でも、日記や手紙、書類などを捨てようと考えておられる方は、是非、ご一報いただきたい（電話090-1643-15436）。どんな文書が、資料として重要になってくるのかは、私も論文を書くまでわからない時がある。今こそ五〇年代の京都の民衆運動の記録を残し、総括していける最後の時である。この場を借りてお願いしたいと思つて筆を執つた。よろしく願ひする。